

【学会レビュー】

3rd International workshop on Mt. Fuji Project

(July 16, 2007) 報告

(第3回富士山プロジェクト国際ワークショップ, 2007年7月16日)

土器屋 由紀子

東アジアの大気汚染が深刻な問題になり始めており、上空の自由対流圏の大気を長距離輸送される汚染物質を観測に、山岳の利用が注目されている。2004年に無人化された気象庁の富士山測候所を活用して、東アジアのネットワークに加わることを目指して、2007年7月17日、World Eco-Science Network Conference (世界エコ・サイエンスネットワーク会議) がNPO法人「富士山測候所を活用する会」と株式会社電通の共催で行われた。

その会議のサテライトミーティングの一つとして、表記集会を企画運営した。世界の山岳大気の観測研究を行っている第一人者が集まる機会に、是非、情報交換を行いたいという声に呼応して、急遽計画したもので、休日ではあったが、会場の私学会館の一室に30名以上の研究者が集まり、活発な議論が行われた。会議の概要は下記のとおりである。

趣旨説明および座長

1. 土器屋由紀子 (江戸川大): 富士測候所の現状
2. Dr. Russ C. Schnell (NOAA, USA) 私たちの呼吸している空気
コメント: 畠山史郎 (東京農工大学)

招待講演

1. Dr. Paolo Laj (EUSAAR, France)
ABC ピラミッド, ヒマラヤの高所 (5,100 m) エアロゾルステーション

2. Dr. Paolo Laj (EUSAAR, France)
EUSAAR (ヨーロッパ大気エアロゾル研究) 総合インフラストラクチャー計画
コメント: 上野健一 (筑波大学)
3. Dr. Leonard A. Barrie (WMO, Switzerland)
全球大気観測のための WMO (GAW) における高所山岳の寄与
コメント: 堤之智 (気象庁), 兼保直樹 (産業技術総合研究所)
4. Prof. N.-H. Lin (National Central University, Taiwan)
東南アジアのバックグラウンドステーションとしての鹿林山 (海拔 2,862 m)
コメント: 五十嵐康人 (気象研究所)
5. Prof. Yoon Shin Kim (Hanyang University, Korea)
提案: 長白山を大気モニタリングのベースラインステーションに
コメント: 岩坂泰信 (金沢大学)

MLO (米国海洋気象庁・マウナロア観測所) の Schnell 博士に共同で座長をお願いし、ヨーロッパの大気エアロゾル研究の中心である EUSAAR の Laj 博士, 国連 WMO (世界気象機関) GAW (世界大気監視) プログラムの中心である Barrie 博士, 台湾・中央大学林能軍教授, 韓国・漢陽大学金潤信教授の講演を中心に、日本の研究者がパワーポイントを示しながら随時コメ

ントを加えると言う形で行われた。予めお願いしたコメンテータ以外にも質問やコメントが続出し、コーヒーを会場へ運び込み、ブレイクの時間も惜しんで活気ある討論が行われた。

Laj 博士の話はイタリアを中心とした ABC (Atmospheric Brown Cloud) ピラミッド観測所についてであったが、経済発展著しい中印両国の間にあるエベレストに目をつけたプロジェクトであり、20 世紀に越境大気汚染で多くの森林や湖沼を失い、現在回復期にあるヨーロッパの実力を見せられた感があった。大気観測のデータの議論に次いで、施設の維持管理についても質疑が集中した。シェルパ族の管理運営に助けられ、遠隔操作でイタリアからデータを入手している現状は、

富士山測候所の維持管理で腐心している日本の研究者にとってうらやましい話であった。

また、2006 年から連続観測を開始した台湾・鹿林山ベースラインステーション (LBS) の林教授からは、東アジアの太平洋岸の風下の地点として、北側を富士山、南側を鹿林山でカバーしようという共同研究の提案が出された。

謝辞 世界エコサイエンス会議で研究者を招聘し、議論の機会を与えられた株式会社・電通に深謝申し上げる。また、この会議の講演予稿集は、短時間に手作りで編集されたが、江戸川大学・環境デザイン学科の3年生高橋岳君ほかの協力で無事当日配布することができた。併せて感謝する。